

Śabara の bhāvanā 論における前提

片 岡 啓

聖典解釈学たるミーマーンサーは、祭式文献ヴェーダの字句解釈（言葉→対象）に終わるものではなく、積極的な読み込み（対象→言葉）をも行っており、このことは先行研究において必ずしも十分には注意されてこなかった。以下で筆者は、*Jaimini-Sūtra* (JS) への現存最古（後六世紀前半）の注釈 *Śabara-Bhāṣya* (ŚBh) において、bhāvanā 論を扱う際に Śabara (Ś) が前提とするものを引き出し、彼の記述の中に〈対象→言葉〉という方向性が認められることを指摘する。

bhāvanā 論の中心的記述である ŚBh 2.1.1 に対し附論的に展開される ŚBh 2.1.2-4 において Ś は、日常言語ではなく祭式内諸要素の連関構造に基づいて、動詞が bhāvanā を理解させることを導いている¹⁾。結論から述べるなら Ś は、動詞語根の意味 (dhātvartha) = 祭祀行為 (karman) とは異なる bhāvanā の存在を理由を示すことなく前提とした上で、それを理解させるのは動詞 (ākhyāta = bhāva-śabda) と名詞・形容詞 (nāman = dravya-guṇa-śabda) のいずれなのかという問題設定をし、その根拠を対象間の関係に求める。即ち、bhāvanā と動詞語根の意味との関係に基づいて、bhāvanā が動詞 (ākhyāta = bhāva-śabda) から理解されると結論している。言い換えるなら、対象間の関係に基づいて対象と言葉の関係を導いている。以下、彼の議論を要約する。

Ś はまず一般的な前提から出発する。即ち、名詞・形容詞 (dravya-guṇa-śabda) の対象である実体・性質 (dravya-guṇa) は、言葉の適用時に既に存在するという点で既生 (bhūta) である²⁾、一方、動詞 (ākhyāta = bhāva-śabda) の対象である動詞語根の意味 (祭祀行為) は、言葉の適用時には未だ存在しないという点で未生 (bhavya : これから生じるもの) である³⁾。(以下、形容詞は省略。) 今、動詞と名詞 (dravya-śabda) がヴェーダ文中に一緒に述べられている場合⁴⁾、その対象である祭祀行為 (karman) と実体 (dravya) は、実体が祭祀行為を目的とするか、祭祀行為が実体を目的とするかいずれかの関係を持つはずである。

この問題を解決するために Ś は、ミーマーンサーの諸解釈原則 (nyāya) の中でも対象間の関係を扱う解釈原則「既生対象は未生対象を目的とする」(bhūta-bhavyāya-nyāya) を用いる。実際にはこの原則は、対象間の関係を扱う原則「未

知対象想定は最小限にするのが正しい」(adṛṣṭa-kalpanālpīyasī nyāyā) 及び、対象と言葉の関係を扱う原則「*ヴェーダは無駄であってはならない」を前提としている。即ち、既生対象が未生対象に貢献する場合、目的は既知であるが⁹⁾、未生対象が既生対象を目的とする場合には、既に生じてしまっているものを更に生じさせることになるので、それを規定するヴェーダ文も無駄になってしまう。それを回避するためには未知対象を目的として想定しなければならないが⁶⁾、そのような想定は最小限にすべきであるので、前者、即ち、既生対象(実体)が未生対象(祭祀行為)を目的とする場合が採用される⁷⁾。

今、実体は祭祀行為を目的として関係したので主要素への期待(pradhāna-ākāṅkṣā)は鎮まっている⁸⁾。一方、祭祀行為は未だ目的が定まっておらず主要素への期待を抱えたままとなっている。ここで Ś は、主要素への期待を持つこと(sākāṅkṣatva)を、名詞・形容詞、動詞のいずれから bhāvanā が理解されるのかを決定する理由と見なしている⁹⁾。このような諸要素間(或いは諸語間)の関係は、白色・牛という性質・実体を例に取り既に ŚBh 1.1.24-26 で限定関係として一般的に示されている¹⁰⁾。特に今問題となっている「期待を持つこと」は、一文の二条件(一つの目的を持つこと・分裂すると期待を持つこと¹¹⁾)の一部として ŚBh 2.1.46 で示されるものであり、そこでの議論を背景にしている。今、実際には Ś はスートラの字句を用いながら、天界を望む人(svarga-kāma)と祭祀行為との関係を〈期待を持つこと〉の内容として記述している¹²⁾。簡潔に述べるならこれは、実体と祭祀行為のいずれが bhāvanā に近いのかを取り上げた上で bhāvanā と直接に関係するのが実体ではなく祭祀行為であるとしたことになる。

このように、対象間の関係において祭祀行為が bhāvanā と直接に関係することを、Ś は〈期待を持つこと〉の実質内容と考えている。そして、この関係に基づいて、bhāvanā を理解させるのは、名詞ではなく動詞であると結論する。即ち、対象と言葉の関係は対象間の関係を前提としている。ここに、ミーマーンサー独自の祭式分析に基づいて動詞が bhāvanā を理解させることを導くという方向性〈対象→言葉〉が認められる。

尚、ミーマーンサー学説全体から見た時、この手続きには問題がある。何故なら、Ś 自身が ŚBh 2.1.30 で示しているように、ミーマーンサーの定説では、言葉と対象の関係は日常の言語使用に基づくべきだからである¹³⁾。即ちヴェーダ解釈で、日常言語とは異なる特別な意味は通常認められないので、日常の言語使用に基づくことなく祭式内諸要素の関係を根拠として同理論を導く Ś の手法には問題がある。複注釈者 Kumārila が同理論を導くにあたって、Ś 説を重視せず

Mahā-Bhāṣya に見られる議論 (動詞が bhāvanā を理解させるという言葉と対象の問題だけでなく動詞語根の意味とは異なる bhāvanā の存在を示すという対象と対象の問題をも一挙に解決する) を援用した意図は、ここにあると思われる。

- 1) これに対し, Kumārila (後七世紀前半) は, *Tantra-Vārttika* (TV: Ānandāśrama ed., 1929-34) で, *Mahā-Bhāṣya* の議論を背景として, 理論「動詞は bhāvanā を直接表示する」を確立した。(Cf. 黒田泰司「Kumārila の bhāvanā 説について (1)」『印度学仏教学研究』28-1, 1979, pp. 458-456.) 即ち, “kiṃ karoti?” “paṭhati” のような日常の言語使用に基づいて, 普遍・特殊として kriyā・動詞語根の意味が引き出されることをまず示し, 対象と対象の問題に解決を与えた。(TV 2.1.1 : tathā ca kiṃ karoti paṭhati gacchatīti sāmānyaviśeṣarūpeṇa sāmānādhikaraṇyaprayogo drśyate. p. 377⁵⁻⁶.) また, その一方で, kriyā = bhāvanā の等式を導いた。(TV 2.1.1 : evaṃ karotyarthadvāreṇa sarvākhyāteṣu bhāvayatyarthāḥ siddhaḥ. p. 378¹⁵.) これにより, 動詞語根の意味とは異なる bhāvanā を, 日常文・ヴェーダ文の別を問わず一般的に動詞が直接表示することを論証し, 言葉と対象の問題に解決を与え, それを, スートラに基づかせた。(TV 2.1.1 : siddhāntavādī tu bhavater ṇijantāt erac ity acpratyaye kṛte bhāvanāvācīnaṃ bhāvaśabdam vyutpādya. p. 374²⁰⁻²¹.)
- 2) ŚBh 2.1.3 : bhūtāt vāt sve pravoge svaprayogakāle vidyamānatvād ity arthaḥ. p. 388⁵. (下線はスートラ本文) 3) ŚBh 2.1.4 : prayogakāle yeṣām artho nopalabhyata ity arthaḥ. p. 388⁸⁻⁹. 4) ŚBh 2.1.4 : bhavyārthās te bhūtārthaiḥ samuccaritāḥ. p. 388¹²⁻¹³. 5) ŚBh 2.1.4 : bhūtasya bhavyārthatāyām dṛṣṭārthatā bhavyārthasya prayojanavata utpattir arthavati. sā ca bhūtena kriyata iti dṛṣṭo 'rthaḥ. p. 388¹³⁻¹⁴. 6) ŚBh 2.1.4 : bhavyasya punar bhūtārthatāyām na kiṃcid drśyate kalpyate cādṛṣṭam. p. 388¹⁴⁻¹⁵. 7) ŚBh 2.1.4 : tasmān na yāgo dravyārthāḥ. p. 388¹⁵⁻¹⁶. 8) ŚBh 2.1.3 : tebhyaḥ parākāṅksā pradhānākāṅksā na vidyata iti. p. 388⁴. 9) Cf. ŚBh 2.1.2 : tasmād ete 'pi sākāṅkṣatvād bhāvavacanāḥ. p. 387⁶⁻⁷; 尚, Ś は, JS 2.1.1 への注釈では, スートラの語句 (bhāvārthāḥ) に沿い, 動詞が bhāva を意味すること (bhāvārthatva) を, 動詞から bhāvanā が理解される根拠と考えているようである。これについては別稿で論じる予定。10) Cf. ŚBh 2.1.46 : yathā ca padaṃ padena viśeṣyate tathoktaṃ tadbhūtanām iti. p. 448⁷⁻⁸. 11) Cf. ŚBh 2.2.27 : ekārthatvaṃ vibhāge ca sākāṅkṣatvam ity ekavākyatvam. p. 557⁸⁻⁹. 12) ŚBh 2.1.4 : kiṃ ca āśritatvāt prayogasya. eteṣām prayogaḥ puruṣeṇāśrito bhavati puruṣasambaddhā bhāvanocyate. puruṣaṃ hi vadati bhāvayed iti. tena svargakāmo yajeteti puruṣo 'pi pratīyate yāgo 'pi sambandho 'pi. p. 389¹⁻³ 13) ŚBh 1.3.30 : ya eva laukikāḥ śabdās ta eva vaidikās ta evaiṣām arthāḥ iti. p. 291⁹⁻¹⁰.

<キーワード> ミーマンサー, Śabara, Kumārila, bhāvanā

(東京大学大学院)